

# 南方熊楠と「テレパシー」という言葉に関する考察

唐澤 太輔（早稲田大学社会科学総合学術院・助教）

キーワード：テレパシー、SPR、南方熊楠、フレデリック・マイヤーズ

## はじめに

知の巨人・南方熊楠<sup>みなかたぐまぐす</sup>（1867～1941年）が、日本で極めて最初期に「telepathy テレパシー」に関心を示していたということは、ほとんど知られていない。そもそも、日本においては、この「テレパシー」という（誰もが知っていると言っても過言ではない）言葉を、一体誰が作ったかということさえ知られていない。この語は、心霊研究者であったフレデリック・マイヤーズ（Frederick William Henry Myers, 1843～1901年、古典文学者・詩人）による造語である。マイヤーズの知名度は、日本において極めて低い。「テレパシー」のみならず「supernormal 超常」という語を作ったのもマイヤーズである。また彼は、「subliminal-self 潜在自己」という語をいち早く使い、C.G.ユングへ影響を与え、さらには S.フロイトを初めてイギリスに紹介した人物でもある。本稿では、マイヤーズによる「テレパシー」という語の作成経緯とその周辺について、熊楠との関係を中心に考察していく。

1、『南方熊楠全集』は、『全集』と略記した。

・『全集』＝南方熊楠著／岩村忍・入矢義高・岡本清造監修、飯倉照平校訂、『南方熊楠全集 1～10 巻、別巻 1、2』、平凡社、1971～1975年

2、『南方熊楠日記』は、『日記』と略記した。

・『日記』＝南方熊楠著／長谷川興蔵校訂、『南方熊楠日記 1～4 巻』、八坂書房、1987～1989年

3、『高山寺蔵 南方熊楠書翰 土宜法龍宛 1893－1922』は、『高山寺資料』と略記した。

・『高山寺資料』＝南方熊楠著／奥山直司・雲藤等・神田英昭編、『高山寺蔵 南方熊楠書翰 土宜法龍宛 1893－1922』、藤原書店、2010年

4、『南方熊楠 土宜法龍往復書簡』は、『往復書簡』と略記した。

・『往復書簡』＝南方熊楠・土宜法龍著／飯倉照平・長谷川興蔵・中沢新一編・解説、『南方熊楠 土宜法龍往復書簡』、八坂書房、1990年

## 1、熊楠による「テレパシー」という語の使用

熊楠が、「テレパシー」<sup>1</sup>という言葉を文章において初めて使用したのは、1902年3月26日付（推定）の土宜法龍（1885～1923年、真言僧、熊楠とはロンドンで知り合い、その後書簡のやり取りを行った）宛て書簡においてである。

四年計り前に英国科学奨励会にて予「日本齋忌考」を読み、此ときの会長テレパシー（神通、乃ち人の思ふことをそのまま知る法、又他に伝る法）は今後望みあり、尤も験究すへしといひ居たり。又催眠術などにも熊楠の心作用を貴下の心に伝え、一人を他人に、他人を一人になし畢る方あり。これらは決して一笑に附し去るべきに非ず。研究せば物心以上、乃ちせめては精神界の原則を知る端緒ならん。（1902年3月26日付（推定）土宜法龍宛書簡）[高山寺資料：277]

「四年計り前」とは、熊楠がロンドンに滞在していたときのことである。熊楠は1892年から1900年までロンドンに遊学していた。熊楠は「日本齋忌考（英題‘On Tabu in Japan in Ancient, Mediaeval, and Modern Times’）」を執筆し、これを1898年に開催された英国科学振興協会（British Association for the Advancement of Science、通称BAAS）へ送っている。しかし熊楠は原稿を送っただけで、この会には参加しなかった。原稿は代読されたと思われる。BAASの当時の会長は、ウィリアム・クルックス（Sir William Crookes, 1832～1919年、化学者・物理学者）であった。クルックスは、この会において「テレパシーは今後望みあり」と講演したようだ。化学者・物理学者であったクルックスは、心霊現象にも興味を持っており、1896～97年には、英国心霊現象研究協会（The Society for Psychical Research、通称SPR<sup>2</sup>）の会長も務めた。

## 2、SPR 発足の経緯

SPRは、1882年2月20日に発足した。初代会長を、ケンブリッジ大学<sup>3</sup>の倫理学教授であったへ

<sup>1</sup> 熊楠は、基本的に「telepathy」を、そのまま「テレパシー」と言う。1904年4月17日～6月15日に書かれた土宜法龍宛書簡〔武内：68〕においては、「心神通」と書き、「テレパシー」とルビを振っている。

<sup>2</sup> 筆者は、2014年8月26日～9月11日まで、ケンブリッジ大学図書館において、SPRのメンバーリストを発足当時から現在に至るまで、調査を行った。その結果、PSPR 巻末の Member List（1903年）に、Anesaki, M., Japanese とあった。これは、姉崎正治（号・嘲風、1873～1949年）だと思われる。彼こそ日本人初のSPR会員である。宗教学者、東大教授として著名な姉崎は、1900年にドイツ、イギリス、インドに留学している。1903年帰国した。帰国後、東大で初めて開いた講義は「神秘主義」に関するものだった。1923～1934年まで東大で図書館長を務め、関東大震災で焼失した図書館の復興に尽力した。姉崎の著書『復活の曙光』には、「感応交通」などという言葉も出てくる。また1910年9月には福来友吉による御船千鶴子の透視実験に立ち会っている。姉崎は、1909年突如としてSPRを退会している。

<sup>3</sup> ケンブリッジ大学は、現在においても自然科学分野において、その業績が世界的にも突出していることはよく知られている。ノーベル賞受賞者は80人を超え、世界最多を誇っている（一方オックスフォードは人文・社会科学分野で優れた人材を輩出している）。例えば、ニュートン、ダーウィン、ホーキングなどは良く知られている。しかし、突出しているのは、実は自然科学だけではない。古来、オカルティズム研究も非常に盛んな場所なのである。実は、1899年前後このケンブリッジ大学に日本学講座を開設し、熊楠をそこの助教授にするという話があったようである。しかし熊楠によると、第二次アングロ・ボーア戦争（通称ボーア戦争、南アフリカ戦争）の勃発に

ンリー・シジウィック (Henry Sidgwick, 1838～1900 年) が務めた。そして、この会の発足メンバーの中心的人物が、フレデリック・マイヤーズであった。マイヤーズは、ケンブリッジ大学(トリニティ・カレッジ) 在学中にシジウィックに師事し、その後も彼を人生の師と仰いだ。後にマイヤーズ自身も SPR 会長を務める (1900 年) ことになるが、初代会長としてシジウィックを据えたのには、いくつかの理由があった。まず、当時シジウィックは、哲学者・倫理学者として広く世に知られていた上、幅広い人脈を持っていたからである。次に、「多くの人々を、うっかりすると敬遠されかねないこの会に惹きつけるだろう」[三浦：118] とも期待されていたからである。

熊楠は、SPR を「心理研究会」「幽霊等の会」「不思議会」「ロンドン不思議会」などと呼んでいる。法龍は、この会に非常に関心を持っており、熊楠に調査を依頼するほどであった。例えば、法龍から熊楠へ宛てた以下のような書簡が残っている。

またウエスト・ミンスター寺の内に「ソサイチー・ホール・サイキカル・リゾールチー」というものありて、しきりに幽霊等のことを取り調べおり候由。…(中略)…御取り調べ下さらずや、願ひ上げ候。(日付不明、南方熊楠宛書簡)[往復書簡：8]

ここで法龍が言う「ソサイチー・ホール・サイキカル・リゾールチー」とは、The Society for Psychical Research、つまり SPR のことである。SPR 発足当時、事務所(ロッジ)は、「14, Dean's Yard, Westminster, S. W.」[PSPR1：6] にあった。そこは、ウエスト・ミンスター大寺院に隣接するディーンズヤード内である。ロンドンのど真ん中の一等地と言ってよいだろう。法龍が、ロンドンにいた熊楠に調査を依頼した時期も、どうやらここに事務所はあったようだ(この頃、熊楠はオカルティズムにかなり懐疑的で、SPR の調査も行なっていない)。因みに SPR は、現在(2015 年 1 月)、「49 Marloes Road, Kensington, W8, 6LA」[SPR・ホームページ] に、住宅街の一角にひっそりと事務所を構えている(地下鉄ハイ・ストリート・ケンジントン駅から徒歩 10 分)。

SPR には、シジウィック、マイヤーズの他に、エドモンド・ガーニー (Edmund Gurney, 1847～1888 年、心理学者)、アーサー・ジェイムズ・バルフォア (Arthur James Balfour, 1st Earl of Balfour, 1848～1930 年、政治家、哲学者) らケンブリッジの優秀な知識人が集まった。当時 SPR では、自動発話、人間同士のテレパシー交信の可能性、催眠術とテレパシーの関係こそが、心の仕組みについて何かを解明すると考えられ、集中的な研究課題とされていた<sup>4</sup>。SPR は 1882 年 7 月に *Proceedings*

より、この話はお流れとなってしまったらしい。

<sup>4</sup> マイヤーズは、SPR メンバーと数々の心霊実験を行った。SPR 事務所は勿論のこと、しばしばその舞台となったのが、「マイヤーズの自宅」である。これまで、筆者がどの文献を見てもその場所は「マイヤーズの家」「ケンブリッジのマイヤーズの自宅」としか載っていない。今回、SPR メンバーリストを精査した結果、その場所が明らかになった。

それは、Leckhampton House である。ケンブリッジ大学図書館から歩いて 10 分にあるその屋敷は、建築家のウィリアム・C. マーシャル (William C. Marshall) という人物によって 1881 年に設計・建築された。そして最初の住人がマイヤーズその人だった(夫人と共に入居)。現在はケンブリッジ大学コーパス・クリスティ・カレッ

for the Society for Psychical Research (本稿では、PSPR と略記する)『SPR 紀要』第 1 巻を、1884 年 2 月に *Journal of the Society for Psychical Research* (本稿では、JSPR と略記する)『SPR 会報』第 1 号を発刊している。現在も、PSPR は不定期、JSPR は季刊発行している。

因みに日本においては、1886 年に井上円了 (1858~1919 年、仏教哲学者・教育家)が、<sup>みつくりげんぼち</sup>箕作元八 (1862~1919 年、歴史学者)、<sup>たなかだてあいきつ</sup>田中館愛橘 (1856~1952 年、地球物理学者)、<sup>つぼうちしょうよう</sup>坪内逍遙 (1859~1935 年、小説家・評論家)、<sup>みやげせつれい</sup>三宅雪嶺 (1860~1945 年、哲学者・評論家)など多岐にわたる研究者たちと共に「不思議研究会」という会を発足させている。SPR 発足後わずか 4 年後のことである。円了が SPR の存在を知っていた可能性は極めて高い。しかし「不思議研究会」は、円了の病気のため、目立った成果を挙げることなく、すぐに休会となってしまった。

### 3、「テレパシー」という造語

語源的には、「telepathy」の「tel-」は遠隔、「pathy」は感情を表す。つまり「テレパシー」とは、遠くにいる者にもう一人の者の感情が(あるいは思考も)伝わるというという事柄である。「テレパシー」に関する専門書には、「マイヤーズの造語」あるいは「マイヤーズによって提唱された語」と付記されていることが多い。例えば『精神分析事典』には「テレパシー」について、以下のように記載されている。

テレパシー [遠隔伝心] [英] telepathy : 一般心理学では、1882 年にマイヤーズ Myers, F. が提唱し、実験超心理学の確立者ライン Rhine, J. B. が 1934 年に透視、予知を含む超感覚的知覚 (ESP: extrasensory perception) の一型として再定義した。 [小此木 : 354]

他の事典においても同様、大体マイヤーズによってこの語が提唱されたことは記載されている。しかし、彼がどこで最初に用いたのかは述べられていない。

この「テレパシー」という語が、初めて公に出たのは、PSPR の第 1 号 (1882 年 12 月号) ある。

.....and we venture to introduce the words *Telæsthesia* and *Telepathy* to cover all cases of impression received at a distance without the normal operation of the recognized sense organs.

[PSPR1 : 147]

……そして我々は、認識感覚器官の一般的に挙げられる働きなしに距離を隔てて受け取られる感情の動きに関する全ての事例を網羅する *Telæsthesia*<sup>5</sup>と「テレパシー」という語を考案する。(和訳

ジの学生寮内にあり、レセプション・ホールとして使用されている。

<sup>5</sup> 「テレパシー」とともに紹介された *Telæsthesia* だが、その後マイヤーズは何度か示すが、世間には浸透しなかった。一方「テレパシー」という語は、SPR 会員内はもとより英国内に爆発的に広まった。

一唐澤)

上記の内容は、‘REPORT OF THE LITERARY COMMITTEE’ というパートに記されたものである。これは、SPR 学術委員会の記録であり、会の出席者はマイヤーズを含め 6 名いた。しかし注意しなければならないのは、ここには「テレパシー」という語を、マイヤーズが提唱したとは記載されていないことである。

1901 年、マイヤーズはローマで病死する。マイヤーズの死後、彼の SPR における数十年に渡る成果をまとめた大著 “*Human Personality and Its Survival of Bodily Death vol,1 & 2*” (本稿ではヒューマン・パーソナリティーあるいは HP と略記する)<sup>6</sup>が、1903 年 2 月に発刊された。これは、彼の遺稿をもとに編纂されたものである。この書は、「序論」「人格の分裂」「天才」「睡眠」「催眠術」「知覚上の自動作用」「死者の幻影」「筋肉上の自動作用」「トランス・憑依・エクスタシー」「結語」の全 10 章から成っている。その用語集の欄に「テレパシー」についての定義が以下のようにされている。

.....I first suggested them in 1882. Telepathy may still be defined as “the communication of impressions of any kind from one mind to another, independently of the recognized channels of sense.” [HP1 : xxii]

……私は 1882 年にそれら【*Telæsthesia* とテレパシー】を初めて示した。テレパシーは、「認識感覚器官の経路とは無関係に行なわれるある者からもう一人の者へのあらゆる感情の交信」として定義されうる。(和訳・【】内一唐澤)

ここでマイヤーズは、この「テレパシー」という語を「1882 年に初めに私が示した」、と述べている。筆者の調査の結果、確かに、1882 年 2 月 11 日付のマイヤーズからシジウィックへの書簡の中でこの「テレパシー」について以下のように述べていることが分かった。

What do you think of the words telæsthesia, telæsthec, telepathy, telepathic which I have just invented?

私が創案した telæsthesia, telæsthec、テレパシー、テレパシクという語についてあなたは どう 思いますか。(1882 年 2 月 11 日付シジウィックへ宛書簡、和訳一唐澤) [Trevor : 121]

マイヤーズは、師・シジウィックへ、「テレパシー」という語について創案したが、どう思うかと聞いている。この書簡に対するシジウィックの返事は、今回の調査では見つけることができなかった。

<sup>6</sup> 『ヒューマン・パーソナリティー』は、2015 年 1 月現在においても、日本において和訳・刊行されていない。

ともかく、1882年2月に、マイヤーズによってこの語は考えられ、SPR 学術委員会で紹介され、同年12月にこのレポートがPSPRに掲載されることで、世に知られるところとなったのである。「テレパシー」という語が作られるまでは、そのような現象は、‘thought-reading’、‘thought-transference’、‘ideoscopy’、‘thought induction’ [Williams : 172 参照] など、様々な呼び方がされていた。マイヤーズによって、これらは「テレパシー」という語に集約されたと言って良い。

さて、熊楠は1904年2月12日に、『ヒューマン・パーソナリティ』を取り寄せている。届くや否や、熊楠はこの大著を読みふけている。「虜<sup>とりこ</sup>」になったと言っても良いであろう。そして、それと並行するように、彼の日記にはオカルト現象の記述が増えていくのである。熊楠は余程感銘を受けたらしく、この本の和訳・出版さえ目論んでいた。そして、この著作において熊楠が特に関心を示したのがこの「テレパシー」であった。しかし、熊楠が「テレパシー」という語を知ったのは、少なくとも1902年3月26日付(推定)土宜法龍宛書簡が書かれる以前である。上述したように、この書簡の中で熊楠は既に「テレパシー」という語を使用している。つまり熊楠は、『ヒューマン・パーソナリティ』を読む前に、すでにこの「テレパシー」という言葉を知っていたことになる。

#### 4、熊楠と『ヒューマン・パーソナリティ』

熊楠は、ロンドン遊学中、法龍に向かって「オカルチズムごとき腐ったもの(1894年3月3日付土宜法龍宛書簡)[全集7:218]」と言い放つほど、心霊研究を嫌悪していた。それが、帰国し那智山に籠るころには180度態度が変わる。自身に起きた神秘現象を日記に詳細に書き残し、書簡などでもその話題に触れることが急激に増えるのである。その背景には、マイヤーズによるこの『ヒューマン・パーソナリティ』を入手(1904年2月)し、2ヵ月かけて読破したことがある。

1900年10月、熊楠は遊学先のロンドンから帰国した。経済的理由などによる無念の帰国であった。神戸港に着いた熊楠を出迎えてくれたのは、弟・常楠だけであった。父母は、在外中に既に亡くなっていた。熊楠は帰国後しばらくの間、亡き父と縁のあった理知院(大阪府泉南部)や和歌山市の常楠宅などに身を寄せていた。この頃、熊楠を含め親族が一同に会し、父が残した遺産分配をめぐって夜通し話し合うようなことが何度かあったようだ。それは熊楠に、非常に肩身の狭い思いをさせたに違いない。熊楠の海外遊学には莫大なお金がかかったにも関わらず、当の本人は「蚊帳のごとき洋服一枚」をまとい、動植物の標本と書籍のみを持って帰ってきた。十数年にも渡る海外遊学にも関わらず、学位もとらずに帰国した熊楠に対して、親族の目は厳しかったことであろう。熊楠の、地位や名誉などに全くこだわらない生き方は、「常人」にはやはり理解し難いものであった。1901年10月、熊楠は、弟が経営する南方酒造の勝浦支店を頼りに、紀伊半島南部の勝浦町へ向かう。そして翌年1月から、那智山・大門坂参詣道入口のすぐ近くにある大阪屋という旅館を常宿にすることになる。熊楠は、まるで引き寄せられるかのように、この那智山へやって来た。無念の帰国、親族からの厳しい目、当てのない将来——熊楠はこの、いわゆる「那智隠栖期」、失意の底にあった。端的には精神的危

機状態にあったと言える。そして、そこで様々な不思議な（あるいは神秘的な）体験をすることになる。紙面の都合上、全てを紹介することはできないが、例えば当時の熊楠の日記には、以下のような記述が見られる。

1904年4月25日 雨、夜大風雨

夜大風雨、予、灯を消して後魂遊す。此前もありしが、壁を透らず、ふすま、障子等開き得る所を通る故に迂廻なり。枕本のふすまのあなた辺迄引返し逡巡中、急に自分の頭と覚しき所へひき入る。恰も vorticella が螺旋状に延し後急に驚きひき縮る如し。飛頭蛮のこと多少かゝることより出しならん。[日記2:431]

vorticella とはツリガネムシのことであるが、熊楠は、ツリガネムシが螺旋状に伸びた後、急に縮まるように、自分の魂が抜け出た後、また元の位置（自分の頭と覚しき所）に戻ったという。熊楠の魂は、肉体から抜け出ていたのだ。これはいわゆる「幽体離脱」体験である。「此前もありしが……」というところを見ると、熊楠はこのような「幽体離脱」を一度のみならず、何度か体験したようである（因みに1904年3月20日の日記にも同じような記述を見ることができる<sup>7)</sup>）。このように、幽邃極まる那智山で、精神的危機状態にあった熊楠は、「幽体離脱」をし、時には幽霊を見るなど、さまざまな不思議な体験をした。

このような精神的極限状態の中、熊楠は日中は、粘菌を中心に採集活動に勤しんでいる。そして夜は標本整理と読書に精を出した。さらに、この頃特に関心を持ったのが、特に遊学時代にはあれほど嫌悪していたオカルティズムであった。熊楠は、自身の（精神的）限界と共に、これまで信頼を置いてきた西欧近代科学に対しても限界を感じ始めていたのである。その限界を乗り越えるために参考にしたのが、この『ヒューマン・パーソナリティー』であった。

因みにマイヤーズ自身が「テレパシー」の研究を始めた理由も、やはり個人的な体験が影響している。マイヤーズには、思いを寄せながらも結婚できなかった女性（従兄の妻、アニー・マーシャル）がいた。1876年にアニーは自殺する。彼女が自殺してからは、マイヤーズは、彼女があの世界から接触してきているという証拠を必死になって探し求めたという。マイヤーズには「テレパシーや催眠、

<sup>7)</sup> 1904年3月10日付日記の内容は、以下の通りである。

うつゝにて（幻想といふこと知りながら）黒き紐ある人形如きものとなり、龍動のアンダーグラウンド鉄道の上り路如き所を進み又却退し（進退とも頭は同一方に向ひ）又下におりる一所、家の外に一男一女（日本人）あるを見るをわざと見ず、人形如きものに自分の意志集る。注意点と見ゆ。（下線—唐澤）[日記2:413]

熊楠は、黒い紐のある人形のようになってロンドンの地下鉄の登り道のような所を進み、また戻ったという。熊楠は、「睡眠中に靈魂抜け出づとの迷信」という論考において、この時の出来事を以下のように書いている。

七年前嚴冬に、予、那智山に孤居し、空腹で臥したるに、終夜自分の頭抜け出で家の横側なる牛部屋の辺を飛び廻り、ありありと闇夜中にその状況をくわしく視る。みずからその精神変態にあるを知るといえども、繰り返し繰り返しかくのごとくなるを禁じえざりし。その後 Frederic W. H. Myers, 'Human Personality,' 1903, vol. ii, pp.193,322 を読んで、世にかかる例尠なからぬを知れり。（1911年8月「睡眠中に靈魂抜け出づとの迷信(1)」『人類学雑誌』27巻5号、下線—唐澤）[全集2:260]

潜在自己などの研究が、人類の心の仕組みを解明する手がかりになるはずだ」という、崇高な学的目標があった。しかし、その背景には、このような個人的な、忘れられない体験があったことも見逃すことはできない。またマイヤーズは、当時の心理学に、「魂の科学」の役割を果たすことを望んだという。「魂の科学」——「魂」と「科学」という一見正反対の言葉を並列させた奇妙な語である。この言葉からは、マイヤーズが、まるで19世紀に確立された近代科学と、信仰の間の境界線を越えようとしていたように感じられる。マイヤーズは、心霊研究によって近代科学と宗教の古い対立を崩そうと考えていたのである。

## 5、『ヒューマン・パーソナリティー』の影響

「テレパシー」という語は、特に『ヒューマン・パーソナリティー』発刊後、新聞などを通して国内に広まっていった（この著作は当時、大学において心理学の教科書としても用いられていたという〔三浦：124〕）。1903年2月に発刊されたこの著作は、英国新聞紙上でも広く紹介された。1903年内に限って見ても、18もの記事を見ることができる<sup>8</sup>。

熊楠は、前述したとおり、その著作の和訳・刊行さえ構想していた。熊楠は同書について、「抄訳し、それに小生の注を付し、最後に小生の論を付し……」（1904年3月24日付土宜法龍宛書簡）〔往復書簡：402-403〕と書いている。つまり翻訳し、注釈をつけた上でさらに熊楠自身の論を展開し出版しようと考えていたようだ。しかし結局、それは実現されることはなかった。熊楠は、この書を「近来希なる著作〔武内：69〕」<sup>9</sup>とまで評価しており、彼に与えたであろうその影響力の大きさが

<sup>8</sup> 例えば、以下の紙面で言及されている。詳細な内容は、The British Newspaper Archive (<http://www.britishnewspaperarchive.co.uk/>) で閲覧可能である。

1. 'SCIENCE OF A FUTURE' *Portsmouth Evening News*, 11 February 1903
2. 'Non title' *Sheffield Daily Telegraph*, 7 March 1903
3. 'CRBALATIOX AND CRIME' *Aberdeen Journal*, 4 March 1903
4. 'MAGAZINES' *Aberdeen Journal*, 11 March 1903
5. 'LITERATURE AND ART' *Sheffield Daily Telegraph*, 11 March 1903
6. 'DOES MAN SURVIVE DEATH?' *Edinburgh Evening News*, 18 March 1903
7. 'LITERARY NOTES' *Dundee Courier*, 30 March 1903
8. 'ARE MEN INDIFFERENT TO RELIGION?' *Cheltenham Chronicle*, 4 April 1903
9. 'IT SILAS K. BOCCINO' *Burnley Gazette*, 4 April 1903
10. 'THEOSOPHICAL PROBLEMS' *Edinburgh Evening News*, 9 June 1903
11. 'MAGAZINES' *Aberdeen Journal*, 15 June 1903
12. 'GOSSIP OF TODAY' *Yorkshire Evening Post*, 19 June 1903
13. 'HONEY MARKET' *Manchester Courier and Lancashire General Advertiser*, 13 July 1903
14. 'BROWN AND WOODLEY' S Library' *Hasting and st. Leonards Observer*, 3 August 1903
15. 'MR BERTRAM KEIGHTLEY, MA., LONDON' *Edinburgh Evening News*, 10 August 1903
16. 'LITERATURE' *Aberdeen Journal*, 19 August 1903
17. 'THE HIBBERT JOURNAL' *Dundee Courier*, 11 December 1903
18. 'GOSSIP OF THE DAY' *Sunderland Daily Echo and Shipping Gazette*, 22 December 1903

<sup>9</sup> 熊楠は、この書簡を1904年4月17日に書き始めたようだが中断し、6月15日に再び書き始めている。消印



うかがえる。熊楠が、その生涯における論考（未発表手稿も含む）の中で、『ヒューマン・パーソナリティ』（引用・参照ページ数を明らかに表記しているもの）に言及している箇所は、以下の通りである。

- (1) 「睡眠中に靈魂抜け出づとの迷信」、『人類学雑誌』27巻5号、1911年8月 [全集2:260]
- (2) ‘Twins and Second Sight’、*Notes & Queries* 11s. iv. iii. 469; iv. 54、1911年8月 [全集10:177]
- (3) 「南天の葉と二股大根 紙上問答」『郷土研究』1巻4号、1913年6月 [全集3:214]
- (4) 「臨死の病人の魂、寺に行く話」『郷土研究』2巻9号、1914年11月 [全集2:273-274]
- (5) 「馬に関する民俗と伝説」『太陽』24巻14号、1918年11月 [全集1:312]
- (6) 「自分を観音と信じた人」未発表手稿 [全集6:408-409]
- (7) 「巫が高処に上る」未発表手稿 [全集6:413]
- (8) 「猫や鼠と男女の関係」未発表手稿 [熊楠研究6:290-291]

以下では、熊楠が「テレパシー」について述べている論考を抜粋する。

The late Frederic W. H. Myers in his ‘Human Personality and its Survival of Bodily Death.’ 1903, vol. i. p. 272, speaks of a butler named James Carroll, who has had another psychical experience, not visual—a feeling of extreme exhaustion and sadness, coupled with the idea of his twin-brother, on the first day of his distant twin-brother’s fatal illness; and again just before the receipt of a telegram summoning him to the death-bed. It is an interesting observation based by Gurney on his analysis of relationships in telepathic cases that the link of *twinship* seems markedly to facilitate this kind of communication.

故・フレデリック W. H. マイヤーズによる『人間個性とその死後存続』（1903年1巻272頁）に、ジェームス・キャロルという名の執事の話が載っている。彼は【可視的なものとは】別の、不可視な心靈的な経験を持っていた。——遠くにいる彼の双子の兄弟に命にかかわる病が襲った最初の日、その双子の兄弟が置かれている状況と共に、極端な疲れと悲しみを漠然と同時に感じたのである。さらには、臨終に彼を呼び出す電報を受けとる直前にも同じことが起こったのである。それは、ガーニーによる、テレパシーの起きる関連性、「双子間」の親密な関係が明らかにこの種の意志伝達を容易にする分析の、興味深い観察記録である。（‘Twins and Second Sight’、*Notes & Queries* 11s. iv. iii. 469; iv. 54、1911年8月、下線・和訳・【】—唐澤） [全集10:177]

---

は、「紀伊勝浦三十七年六月二十■【不明文字】日・京都七条三十七年六月二十三日」となっている。

上記は、1918年8月、*Notes & Queries*に掲載された熊楠の論考‘Twins and Second Sight’である。ここで熊楠は、双子のような親密な間柄は「テレパシー」による交流を助長するということを説明している。この論考において示されている『ヒューマン・パーソナリティー』の参照箇所 (vol.1, p.272) の内容は、以下の通りである。

CHAPTER VI, SENSORY AUTOMATISM, p.272

I quote a case from *Phantasms of the Living*. The informant, a butler named James Carroll, was personally known to Edmund Gurney, and has had another psychical experience, not visual—a feeling of extreme exhaustion and sadness, coupled with the idea of his twin-brother, on the first day of his distant twin-brother’s fatal illness; and again just before the receipt of a telegram summoning him to the deathbed. It is an interesting observation based by Gurney on his analysis of relationship in telepathic cases, that the link of *twins*hip seems markedly to facilitate this kind of communication.

第六章 「知覚上の自動作用」 272 頁

『生者の幻影 *Phantasms of the Living*』からある事例を引用する。情報提供者は、ジェームス・キャロルという名の執事であり、彼はエドモンド・ガーニーの個人的な知り合いであった。そして彼は【可視的なものとは】別の、不可視な心霊的な経験を持っていた。——遠くにいる彼の双子の兄弟に命にかかわる病が襲った最初の日、その双子の兄弟が置かれている状況と共に、極端な疲れと悲しみを漠然と同時に感じたのである。さらには、臨終に彼を呼び出す電報を受けとる直前にも同じことが起こったのである。それは、ガーニーによる、テレパシーの起きる関連性、「双子間」の親密な関係が明らかにこの種の意志伝達を容易にする分析の、興味深い観察記録である。(和訳・【】内—唐澤)

ガーニーとマイヤーズそしてポモドアは、1886年に共著で『生者の幻影』を出版している。上記の事例は、その著書からひかれたものである。この著作の執筆責任者はガーニーであった。死にゆく者、あるいは死者の幻影の実例が収集された大著である。

おわりに

熊楠が、『ヒューマン・パーソナリティー』を読み始めた背景には、彼自身に起きたオカルト現象あるいは精神的危機があった。熊楠は、「那智隠栖期」に起きた数々の不思議な出来事の「答え」を知るための手がかりを探そうとしていた。山を下りてからも、熊楠は、「テレパシー」をしばしば経験していたようである。それは以下のように、娘の文枝（1911～2000年）の話からも知ることができる。

(晩年と死についての質問から)

——先生はたいへん神秘的なところもおありだったようですが、何かお話になられたことはございませんか。

文枝 自分が祈っていると、それがちょうどそのとおりになるとか言っていましたが、そのときは陰しい顔をしていました。顔の変る人で、すごい表情になるときもあるのです。ほんとに怖い表情になる、目がほんとうに鋭くなりますね。激して泣いたところは私は見たことはありませんが……。普通に話しているときは目尻が下がってやさしく、笑っているときは可愛らしいのですが。[南方文枝 1981 : 68] (下線—唐澤)

上記からも分かるように、自分が祈っているとその通りになるということは勿論、他者による「祈念」も信じていた。つまり、遠く離れていても自身の感情が他者へ、あるいは他者の感情が自分へ、何かしらの影響を与えるということを熊楠は信じていた。

また熊楠は、以下のような事柄も述べている。

外国にあった日も熊野におった夜も、かの死に失せたる二人のことを片時忘れず、自分の亡父母とこの二人の姿が昼も夜も身を離れず見える。言語を発せざれど、いわゆる以心伝心でいろいろのことを暗示す。その通りの処へ住って見ると、大抵その通りの珍物を発見す。それを頼みに五、六年幽邃極まる山谷の間に僑居せり。これはいわゆる潜在識が四境のさびしきままに自在に活動して、あるいは逆行せる文字となり、あるいは物象を現じなどして、思いもうけぬ発見をなす。(1931年8月20日付岩田準一宛書簡) [全集9 : 25]

「かの死に失せたる二人」とは、熊楠と同性愛的関係のあった羽山繁太郎・蕃次郎兄弟のことである<sup>10</sup>。繁太郎・蕃次郎共に結核を病み、夭折した。熊楠が海外へ遊学中のことであった(繁太郎 : 享年20、蕃次郎 : 享年25)。熊楠は夢で、この夭折した二人が示した場所へ行ってみると、珍しい植物をよく発見したと述べている。つまり熊楠は、夢において、他者(死者)からの聴覚では聞こえない「声」を聞いていたのである。熊楠は、死者の幻影を見、彼らと「テレパシー」による交流をしてい

<sup>10</sup> 1886年4月29日の熊楠の日記には「[寄書] Mr. MINAKATA is my intimate friend. S. H.」と記されている。「S. H.」とは「羽山繁太郎」のイニシャルである。これは繁太郎に直接書いてもらったものである。熊楠と羽山繁太郎は「intimate friends」であった。「intimate」とは「親密な」という意味であるが、肉体関係のある「親密さ」をほのめかす語である。彼らは「親しい」仲というより「深い」仲であった。「親友」というより「深友」とでも言うべきであろうか。熊楠は、繁太郎の弟・蕃次郎とも「intimate」な関係を結んでいることが日記からうかがえる。

1886年11月20日 [土] 晴

朝津田安麿氏と俱に其兄道太郎氏を訪、米国情報を聞く。午後安麿氏と其邸に之く。夕羽山、志賀、今井、及弟来る。夜羽山と共に寐す。(下線—唐澤) [日記1 : 95]

たと言えるかもしれない。

※

以上見てきたように、イギリス国内において、また熊楠の思想において『ヒューマン・パーソナリティ』が果たした役割は大きい。そして、熊楠は「テレパシー」という概念を正確に理解していた。今後、日本及び世界の心霊研究の系譜に、あるいは社会精神史にマイヤーズの業績（「テレパシー」という語の作成、『ヒューマン・パーソナリティ』の発刊）はどのように位置づけられるのか明らかにしていかなければならない。本稿は、その研究のスタートラインに立つものである。今後は、熊楠がどのような経緯でこの語を知ったのかを明らかにしていく（本稿で述べた通り、熊楠は『ヒューマン・パーソナリティ』を読む前から既にこの語を知っていた）。そして、1882年2月11日付のマイヤーズからシジウィックへの書簡の中で創案された「テレパシー」という語に対して、シジウィックはどのような返事をしたのかを合わせて調査していく予定である。

本研究は、日本学術振興会科研費若手B「フレデリック・ヘンリー・マイヤーズの研究—南方熊楠と関連させて—」による。

## 参考文献

- ・磯前順一・深沢英隆編、『近代日本における知識人と宗教—姉崎正治の軌跡—』東京堂出版、2002年
- ・小此木啓吾編集代表、『精神分析事典』、岩崎学術出版社、2002年
- ・三浦清宏、『近代スピリチュアリズムの歴史—心霊研究から超心理学へ—』、講談社、2008年
- ・武内善信紹介、「〔資料〕土宜法龍宛南方熊楠書簡」、『和歌山市立博物館研究紀要』第25号、2010年
- ・南方文枝、『父南方熊楠を語る』、日本エディタースクール出版部、1981年
- ・SPR ホームページ <http://www.spr.ac.uk/>
- ・John Peregrine Williams, *THE MAKING OF VICTORIAN PSYCHICAL RESEARCH: AN INTELLECTUAL ELITE'S APPROACH TO THE SPIRITUAL WORLD*, A dissertation submitted to the University of Cambridge (Christ's College), for the degree of Doctor of Philosophy, 1984
- ・Myers, Frederick William Henry, *Human Personality and Its Survival of Bodily Death part 1 & 2*, Kessinger Pub Co, 1903
- ・Oppenheim, Janet, *THE OTHER WORLD: Spiritualism and psychical research in England, 1850-1914*／邦訳：和田芳久、『英国心霊主義の抬頭』、工作舎、1992年
- ・SPR, *Journal of the Society for Psychical Research*,

- SPR, *Proceedings for the Society for Psychical Research*,
- Trevor Hamilton, *Immortal Longings: F.W.H. Myers and the Victorian Search for Life After Death*, Imprint Academic, 2009

## A Study about Kumagusu Minakata and the Word ‘Telepathy’

**KARASAWA Taisuke**

Kumagusu Minakata (1867-1941) was a Japanese folklorist, naturalist and biologist. He is famous for discovering many varieties of mycetozoa in Japan.

Most of us don't know that Minakata had a great interest in ‘Telepathy’. And also, in Japan, we barely know who invented this word ‘Telepathy’. The word was originated with Frederick William Henry Myers (1843-1901) who was a psychical researcher in England. Almost all Japanese people don't even know his name. Myers made not only the word ‘Telepathy’ but also ‘Supernormal’. The most famous his book is “Human Personality and Its Survival of Bodily Death”. Minakata was strongly influenced by this book. Minakata often quoted this book in his essays. He was the first person in Japan who had a high value on Myers' achievements in Japan.

This paper will clarify the process of the birth of the word ‘Telepathy’, and make it clear when Minakata started to use this word.

Keywords : telepathy, SPR, Kumagusu Minakata, Frederick William Henry Myers